

風疹患者血清中の IgA オリゴマー抗体について

甲 野 礼 作 (国立予防衛生研究所)
井 上 栄 (慶応大小児科)
武 内 可 尚 (")

目 的

風疹初期回復期血清から protein A によって IgG 抗体を除き蔗糖勾配遠心かけると、9-11 S 付近に HI 活性ピークが明瞭に認められるようになることに気づいた。この HI 活性の免疫グロブリンクラスおよび風疹感染後の出現の時期について検討を加えた。

実 験 成 績

I. この HI 活性は、①プロテイン A と反応しない (図 1c)、②Sephadex G-200 ゲルクロマトグラフィーで Void volume fraction に溶出する、③2ME 低抗性である (せいぜい 1 管の活性低下である) (図 2a)。しかし、2ME 処理によってこの活性は 7 S に沈降する (図 2b)。

(図 2 の遠心用試料は、G-200 の Void Volume fraction を濃縮したもの (a)、およびそれを遠心前に 2ME 処理したもの (b) である)。

④抗ヒト α 鎖の immunosorbent によって吸収されたが、抗ヒト γ 鎖では吸収されなかった。以上のことから、IgA oligomer (dimer, trimer) であると結論した。

II. 次に 4 人の患者から経時的に採取した血清について、この IgA oligomer HI 抗体の消長を調べた (図 3 は患者 No. 1 の Control および protein A 処理血清、図 4 は患者 No. 2 ~ 4 の protein A 処理血清の遠心パターンである)。

考 案

この抗体活性は発疹出現後すみやかに血清中に出現し、のちその力価は徐々に低下し、最後には消失する。

消失の時期は患者によって違う。したがって、IgA oligomer 抗体を検出することは、IgM 抗体と同様近い過去の感染を推定するのに使える。なお、患者 No. 3 の 14 カ月後の protein A 処理血清中の 7 SHI 活性 (図 4d) は、IgG ではなく IgA であった。

图 1

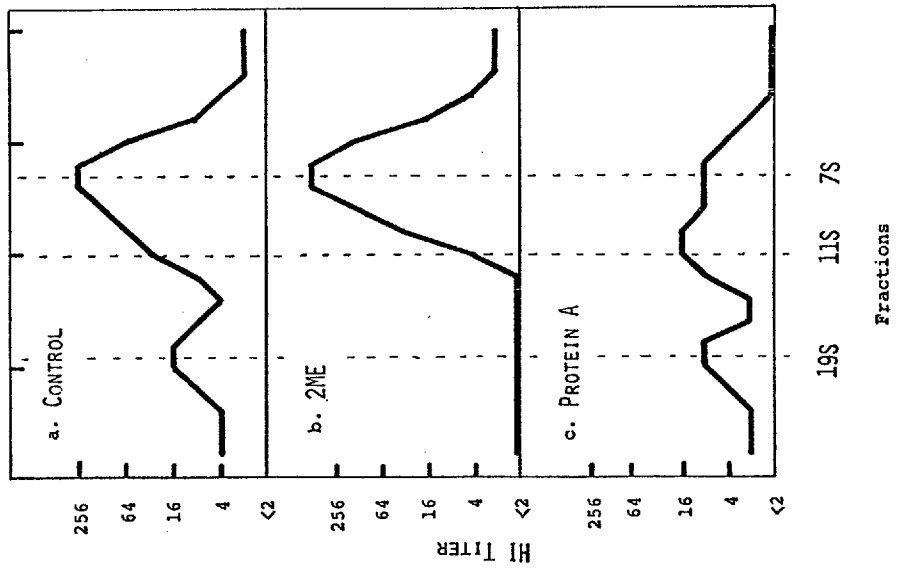
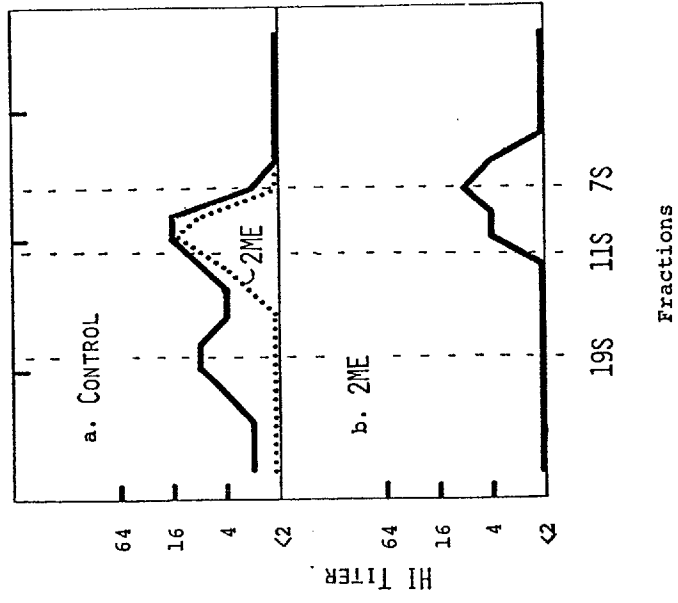
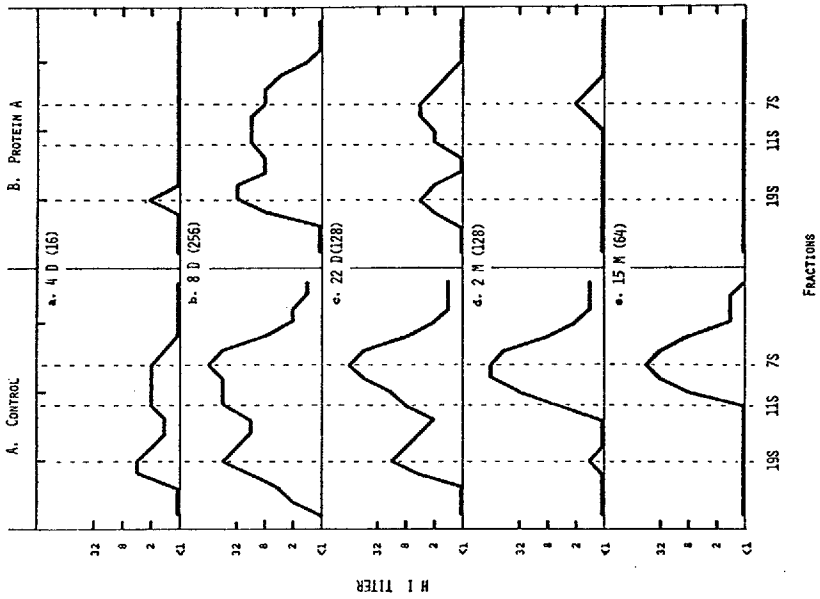


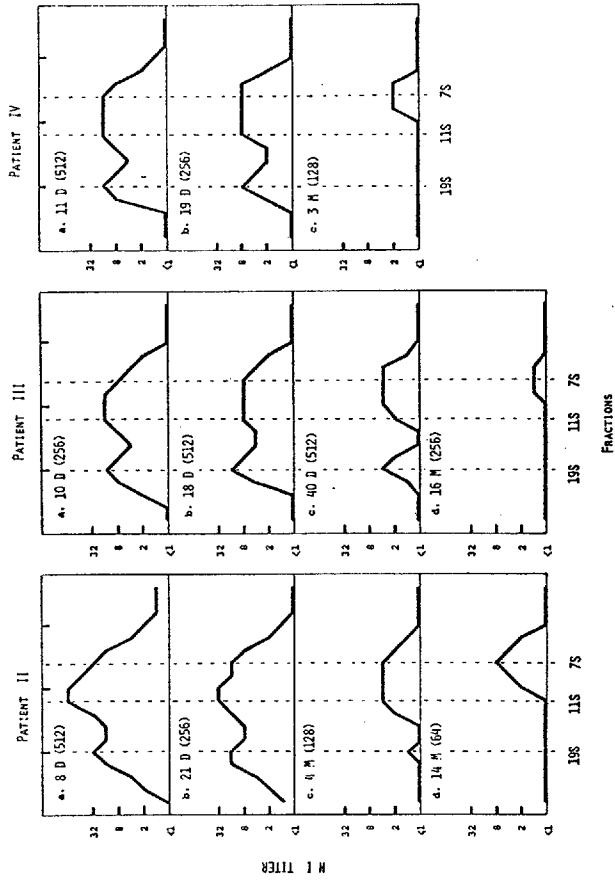
图 2



☒ 3



☒ 4



↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

目的

風疹初期回復期血清から protein A によって IgG 抗体を除き荒唐句配遠心にかけると、9-11S 付近に HI 活性ピークが明瞭に認められるようになることに気づいた。この HI 活性の免疫グロブリンクラスおよび風疹感染後の出現の時期について検討を加えた。